

特集 ● 浜松まつり 屋台

屋台の存在は、豪快な風のまえに、ともすると印象はうすれがち。今回は、この屋台に注目して、全国でもちょっとめずらしいと言われる凝った大工の仕事、さらびやかな飾師・塗師の腕、繊細な彫物……などの制作にたずさわった人々の世界をとおして、私達のお祭り、私達の屋台を考えてみたいのです。たくさんの資料とエピソード、それから職人さんたちが登場します。

こんな話をしていたら、にぎやかなお囃子が耳もとにひびいてきたような気がして、思わず五月晴れの窓をあけてしましました。

2014/06/29

浜松百撰編集部さんの許可を得て掲載

P20 流帳→流張

P21 江坂鐘平→江坂兵衛

P23 岩田新吉→岩田新之助

と思われます。

HP管理人

HAMAMATSU LOOSEN

工匠

「工匠」とは大工さんのこと。屋台づくりの主人公です。しかし、ここに登場の大工さん

たちは、宮大工といわれる特殊な技術と誇りを
もった、腕に自信の職人さんです。材料さがし
に木曾の山に入り、各地の屋台を訪ね歩き、図
面をひき、一年がかりで1台の屋台を創りあげ
た、名のある頭梁たちです。

●ギッシン、ギッシンときしむ音、ガラ、ガラと鳴るわだちの音。綱につかまって居眠りながら歩く子若連、揃いのハッピに揃いの手拭い、たっつけもひきもいねせな兄イが景気の掛声をかけりや、屋台の上のお雛もひとときわ調子づいて、浜松祭りの夜は御殿屋台を立役者にけんらん豪華にすぎていく。

浜松屋台は、高山や長浜のように神社仏閣に関係はなくて、風揚げ会場から風を運ぶ時の運搬具がそのご先祖様である。底抜け屋台といったもんだ。それが戦後運ぶものから見るものに変った。見るものに変ったからにや、見させる腕がいる。見させた腕はいまどこにどうしているのか、けんらんの屋

台のかげにまわって、55台を作った工匠たちを訪ねてみた。

●国鉄工機部をすぎた東伊場町のまん中辺に、高塚房太郎さんは手広く工務店をやっていた。高塚さんが作ったのは昭和25年の板屋町を皮きりに17台。これは全市中の注目を浴びた。何しろ始めての派手な重層(屋根が2段)である。これを見たさに客が県外から泊りがけできたという。

「だけどこの人、納めちゃうまでは夜もろくろく寝なかったですよ。ある晩なんぞ、火事だつてんでとび起きて壁にかぶりつくんですよ。壁が煙りに見えたんですって。寒い時季に作るから火事が一番怖くてね。」

酒も煙草も断つてとりかかったんだと、奥さんが云った。東伊場を作った時は大きすぎて仕事場から運び出せず自分の母家を引きずったと当時の新聞にかいてあった。切り抜きを見せてもらったら、九百人工、大枚二百万円、と見出しででていた。

●屋台の製作は大体1年かかり、材料の仕入れを秋にすませ、112月ごろから仕事にかかる。木にとり組むには寒い時の方がいいのだ。材料は、大木でフシがないといえはまず木曾檜。それを上の部分に使い、柱や土台には堅いケヤキを使う。木曾の山へ何回も足を運ぶのが仕事の始まりらしい。

三獄一郎さんも代々の宮大工で、鴨江の家は五代目の息子さんにまかせて西山町に隠居所を建てたが、64才とは云え50才そこそこしか見えない若さだから、隠居所とはいっても名のみのらしい。25年の田町から42年の鴨江までで12台、35年には、元城、和地山、東上池川と3台もいっぺんに作った。

「コケラ落しの時がいちばんハラ、ハラするね。何しろアスファルトに車輪の跡がつく程の重量だから、ひょっとして輪でもはずれたらバラ、バラだからね、終って屋台置場へ入るまでは心配しずめで、最初の1年などは5日間とも、かげになりひなたになり、つ



■高塚房太郎 掛塚出身、65才。東伊場町在住。13才で修業に入り、5代目を継ぐ。板屋、千才、塩元、元目、向宿、中沢、天神、新、東伊場、八幡、野口、池、大久保製作



■三獄一郎 64才。西山町在住。常盤、伝馬、田、広沢、松城、元城、和地山、東上池川、下池川、西上池川、鴨江製作



浜松の御殿屋台

渥美 実

(市史館さん室朝託)

浜松の風揚げ行事の一環として、いざだんとその興趣をえるものに、御殿屋台の引き廻しがある。

しかし、どうして祭屋台の一種である御殿屋台が、まったく筋違いと思われる風揚げに使用されるようになったのか。

例えば、祭屋台の引き廻しを浜松付近でみる



●大竹高一 豊後出身。17才で高木善左衛門に弟子入りし、昭和32年65才没。平田高、助信、佐野、相生、富吉、天王製作一代で終る。
上浅田2丁目。

きつきりにくつついてたよ。」
●屋台を作るにはほとんど釘を使わない。木ネジとボルトである。だから、屋根に乗るとギシ、ギシ動く。2年目あたりからは木が枯れて軽くなるが、それまでは、あの重量を支えられるシャフトの太さや輪の大きさとかの苦労はなかなからしい。しかも、最初のバッテリーが5キロもの発電機になってからは余けいである。
●平田、高町、天王町などを作った大竹高一さんは、残念にも昭和32年に亡くなって、いまは息子さんが上浅田で美容院と自動ドアの会社を営んでいた。



「酒が好きで、いっくで、短気で仕事好きで。エピソードなんてったら数えきれませんよ。寝るところを見たことがなかったくらいいつも仕事してましたねエ、正月の三日でさえ、近所にやみつともないから年の暮のうちに材料を2階の自分の部屋へ運んで、やってました。みんながはなんてんを着なくなってもなかなか放せなくて。大工の名誉だと思ってたんじゃないですか。予算が多くとれる町内の仕事をしたいなんて云ってましたがネ、たのまれた所はみんな安くきりつめてやりましたよ。27年に作った助信は20万ぐらいでできたんじ

と、掛塚の屋台はその由緒が古いので知られているが、ここでは屋台が氏神貴船神社の祭礼に整揃いをし、神輿がお旅所へ往復のさい、鳴物ではやしたてて氏子がにぎやかに供奉しているこれは必ずしも掛塚ばかりではなく、このように祭屋台は祭礼のさいのねりものとして用いられ



●松本作次郎 高卒。後20才で横原町松浦氏に師事。昭和35年67才で没。寺島山、山下製作。住所、寺島町。



●小池佐太郎 79才。6才で小池万へ親子に入り、16才で東父坂田歌吉に弟子入りし、製作屋台は、横田、殿治、竜澤寺、馬込、中島、大工、亀山、北寺島地、市外を含めると35台。竜澤町掛塚在住。

やないかな？」
はなんてんを愛した最後の職人だろうと、工匠大竹を一代で終らせてしまった息子さんは多少の詫びごろを見せるようにそう云った。
●寺島町の松本作次郎さんも、12年前に67才で亡くなっていた。その直前の仕事で、小笠山高天神の堂宮だったという。「私は不器用だから、宮大工にならずに、こんな線ばかり引いてますよ。」と、作次郎さんの跡つぎは「松本工務所」の看板を見あげた。従業員の子がクスリと笑った。
作次郎さんが作ったのは、寺島町で27年、山下町を32年、砂山町を34年でも、儲かるという仕事じゃないが末代に残る名譽な仕事だからと、幾日も図面とにらめっこして、心魂こめて作っていたということだった。
●鍛冶町など、8台を手がけた小池佐太郎さんからは、掛塚から便せん10枚ほどの便りが送られてきた。

へお尋ねの台数、大正十五年から別紙のように三十五台許り手がけました。浜松風祭りに曳き出されるものはこのうち八台かと存じます。幼児の内は普通屋台でしたが伝馬町あたりから豪華なものになりました。私が目につけるのは、先づ第一に破風の型で、第二は高さに定尺(十五尺)がありますが、それに二階屋根を配置よく割りこむという点、第三は車で、重量のあるものを楽に方向変更をし、軽く曳き歩くことができ、丈夫であるという事です製作にはこんな話がありました。金額も少く、雛祭り用の御殿にヒントを得た図面を持って来られ作ってくれたというのです。これには閉口致しました。大工町の屋台です。彫刻は少く目立ちませんが屋根と床の高さの組合せに苦心しましたので克くご覧下さい。尊敬する斉藤小平先輩に、「苦勞したノウ」と云われた時は嬉し涙が出ました▽
●風まつりはそもそも5月の端午の節

るのが通例である。ところが、浜松の場合ほどのようであったか多くの古老が語るように、浜松では明治の中期まで、町ごとに近くの広場に陣どり、風を揚げてはその勝負を争った。しかし、町の発展につれて人家も増し広場もすくなくなってくると浜松としてはそ

句の祭り、男の子の祭りである。それ

にちなんで、屋台の飾りも、彫刻も、加藤清正の虎退治とか、勇壮なものが

多い。大村善太郎さんは、もともと、

の屋台がいちばんいいね。」
とのこと。神ヶ谷の「上り竜下り竜」も自慢の作だそう。

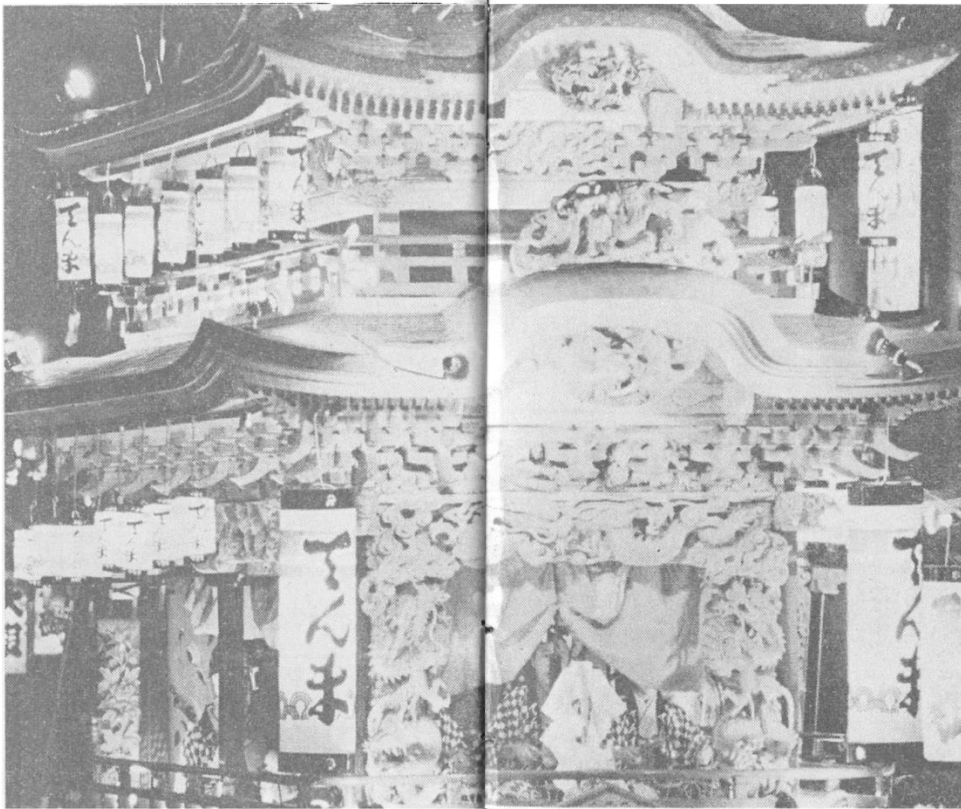
大村善雲と号する彫刻師が本職。そこで、松江町の青年衆から屋台製作をたのまれると、工匠と彫刻の両方を一人でやってしまった。60才の時である。だから彫刻は快心の作を作ったそうだが、もともと奥さんは、側から

「うちで彫ったのじゃ中泉の石原町

●屋台は戦前にも7、8台あったが、それ、八幡様の祭礼に出たもので、それも戦災で全部焼けてしまった。経済力のある町内から、1台、2台といまの屋台が作られていったのは戦後の昭和25年ごろからだ。宗教的行事でもな



■大村善太郎 80才
高村光雲に師事した
叔父について14才か
ら彫刻を学び、香雲
と号す。松江町屋台
を製作。砂山町在住



■鈴木菅吉 70才
先代は船大工で、16
才から修業に入る。
現在建築組合長。中
山町屋台を製作。中
山町22在住

く、市からの寄附金が出るでもなく、町民の力だけでこれだけの立派な屋台がぞくぞくと生まれていったのは、日本国中で浜松だけだそう。

中山町に住む建築組合長鈴木菅吉さんは、自治会長時代に、150軒だけの小さな町内だったが、小さな町内なりの力を合せて作った中山町屋台の製作者である。

「本当にいいのは派手な重層じゃなく、塗りもなく、白木のままだと思う

ね。だんだん、素人衆に分るように派手になっていくが……。野口あたりに一重のいいのがある。しかし、あれも町内の意向があつてね、大工の宰領ひとつではいけない面もあるんですよ。」とのこと。中山町は32年に作ったが50万でできたそう。よそとくらべりや恥かしいが、あれなりに町民は一生懸命やったんだそう。

鈴木さんは、天理教浜松教会と金山神社を作った人だ。

の場所を一か所に定め統制のある行動をとった方がよからうというところになり現在の和地山公園（当時の浜松歩兵第六十七連隊練兵場）を会場と定めた。ちやうど明治も末で、こうなると町から往復の距離も遠くなる、糸巻のような道具類も簡単に持ち運びがむずかしくなる、そこ

でありあわせの荷車を用了。しかし往きはよいとして戻りも血の気のありあまる若ものたちである。その日の勝負に勝つては勝った、負ければ負けだとなおさらのご景気よく引き上げた。それに目も暮れてくる、まっくら闇ではあまりに芸がないというところで、大正へはいって



●平野 孝 75才
竜洋町横町在住。14才から修業に入る。元魚、柴、成子、東田、香、旅籠、海老屋屋台製作。七代目

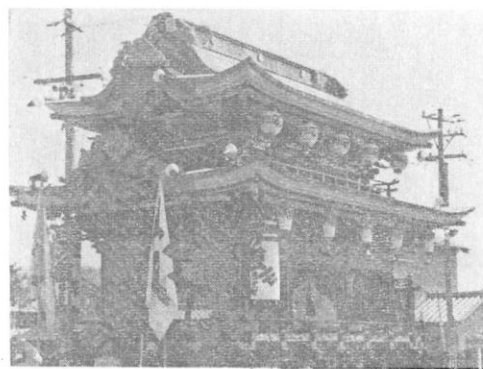
●花田栄一 豊川市牛久保町在住。中島町、佐藤屋台製作。

●一番最後に、竜洋町横町に住む平野孝さんを訪ねた。4年前に、天林寺の山門を作ったのを最後に、腰を痛めて寝たきりなのだそうです。頭は真白だが好々爺そのものの顔で、縞のパジャマの足をふとんに投げ出したまま、

「年かね？ 幾つになったかナア。75才ぐらいだろうよ。屋台は全部で20何台か作ったかな。エート、柴、元魚、成子……。磐田、若林、福田。それに岡崎でも1台……。」

代々が掛塚の頭梁で、平野さんはその7代目。育てた内弟子が8人、人望が厚かったのだろう。

●屋台のよさは、狭い道路一杯に、ギシ、ギシと鼻がふれそうに通リ、2階の窓から手が届くほどに過ぎていくのがいいというが、宗教にもかかわりなく、観光としての目的もなく、町内ごとにもその華やかさを競い合って、だんだんに台数を増していったという浜松屋台。これこそ遠州っ子のバイタリテイというもんじゃなかろうか。



彫刻師

屋台の魅力の一つに彫刻……があります。今にも動きだ

しそうな龍や、繊細な花々の彫刻に、わたしたちはつい我を忘れてしまいます。この、信じられないほどの根気と、高度な技術が要求される彫物の数々は、一体この人達のどこから生まれるのでしょうか。この人達の言葉の端々に、できたらそんなものを探ってみたいと思うのです。

●厳しい徒弟制度の中で幼い頃からみっちり教え込まれ、たたき上げられた人たちだけに、自分の仕事に誇りと自信を持っているのか、物静かにポツリポツリと語るその口調と、眼鏡の奥にキラリと光る鋭い視線。職人というよ

り、芸術家のイメージが強い。彫刻、とくに木彫りという素朴なものに取り組む謙虚さなるがゆえんであろう。木彫師の1人1人に会うたびに、心が静められていった。●現在は二代目の宏さんが受け継いで

ある町が試みに木の柱に四本柱を立て屋根をかぶせ、軒を蕙花でかぎり立て、その中におはやし方がはいり、提灯の灯も明るく道中したところたいへん好評で、各町も競ってこれを作るようになった。しばらくこの底ぬけ屋台の時代がつづいて、現在のような御殿屋台が出現し

たのは、昭和の初期であった。その名のいわれは、唐破風造りで欄や梁にほどこした彫刻が、日光の東照宮をしのばせるものがあるからであった。これは劃期的な出来事で屋台行列もまったく面目を一新し、夜の観衆もいちだんと増すようになった。残念ながらこれらの屋台の大



●早瀬利三郎 名古屋に生む名人、彫松氏に師事。昭和41年60才で没。元目、東上池川、寺島、広沢、木戸、相生、八幡、元新、向宿、砂山、東留原、下池川、佐藤、山下、馬込、鷗江、早田、尾張、中沢町製作。自宅、元城町。



●志村孝士 50才。父義張氏を師とし昭和62年の彫刻の爲初めて来浜する。福井県坂井郡三國町在住。野口屋台製作。

●江坂鐘平 43才。岡崎市長生町在住。近代彫刻を学ぶ。現在岡崎美術協会理事。殿治、田、千才屋台製作。



●浦部一郎 65才。市内元魚町在住。15才で弟子入り。板屋伝馬、天神、池町の屋台彫刻。

いるが、故早瀬利三郎さんが元城町に米たのは終戦後。戦前は有楽街の一角に店を構えていた。11才で名古屋の彫松さんに弟子入りし27才で掛川にはじめて店を持った。彫りのかささと、こ

なしの良さが評判で向宿町、元浜町、八幡町ほか20台近くの屋台を手がけた日曜祭りのないこの仕事、近所づきあいはほとんどなく、7、8人のお弟子さんと仕事一筋。一台に少くとも一年間を労するのだが、期限の短い事を嘆いていたと二代目さんは語る。

●高欄は普通の場合、柵のようにしてあるが、野口町のそれは、正面に厚さ20センチ、側面12センチのそれぞれ一枚けやき材彫りぬぎで、唐子童子の獅子舞群像で囲んである。「向い竜」正面はこれまた樹令三百年長さ4メートル巾1メートル角の一本のけやき素材を使い、三ヶ月余で彫り上げたという。彫刻師の志村流帳、孝士さん親子に託っての生涯忘れぬ仕事であり、野口町の人々にとっても自慢の屋台である

志村さんと当時の屋台建設委員の方々の親交は現在でも続いている、昨年の夏には、越前の国三国へわざわざ志村さんを訪ねたという。

●図柄を考えるのは彫刻師にとって、大変重要な事。各町内それぞれの特色を持たせなくてはならない。江坂鐘平さんによる田町の風神・雷神、千歳町の天狗など、町名の伝統や、風俗が考えてデザインされている。主に人物を彫るのが得意だったのが、浦部一郎さん。人間関係のわずらわしさから弟子はとらず、息子さんもまったく別業。東大卒の博士である。浦部さんの話にこんながある。

「ある町内の屋台に竜を彫って、その出来を大変喜んでもらったのはいいのだが、いざ引き廻しという時に、その町内の子供をひき殺してしまった。みんなは、竜の出来があまり立派だったので、子供を食ってしまったのだ。せめて虎が彫ってあれば、子供を食い殺す事もなかったろうに」と云った」

というのだ。浦部さんは、この他に、板屋町、伝馬町、天神町、池町などとも手がけた。

●高町の屋台を彫刻した上原正市さんにとっては、その前に御興を二つ作った事が印象深いそうだ。御興の鳥居を上り竜下り竜で彫ったのである。其の図柄を好んだ人である。佐藤中町とか中島町の屋台は阿部豊雲さんの彫刻である。阿部さんは父親を親方として13才頃から日曜日や学校の帰宅後鑿の持ち方を教わったという。

東田町、はたご町などは早瀬さんの親方である故彫松さん（名古屋）、岩田新吉さん（名古屋）は、竜禪寺町や亀山町の屋台の彫刻をした。

●三河に住んでいる中山亮一さんも、彫刻だけに生きぬいた人である。いただいたお手紙を紹介してみよう。

毎年五月、男の節句御当地の浜松祭り、過し日思い出します。

三河岡崎に明治43年11月に生まれ

61才。大正15年、17才にして岡崎市長生町の中山由太郎（作号政勝）に入門修業す。師匠の家門を受け継ぎ今日に至る間45ヶ年鑿と彫刻刀と共に語り合ってきたがまだまだ終生続くでしょう。この間御当地に御縁がありましたのは戦前、戦後通し13屋台位いかと思います。中には戦災で焼失した屋台も数々あると思います。

11年 宮竹町 13年 丸塚町
28年 常盤町 29年 新町
33年 松城町 34年 和地山町
34年 元城町 37年 上池川町

屋台彫刻が始まったらもう大変なものです。桜の季節も紅葉の季節もありません。只々黙々と刻み込むのみの人生。一番大切なのは図案。私の場合は昼夜浮かんで来るインスピレーションできめまします。

丹精こめて彫刻致しました屋台が愈々完成し町へ引き出される時の嬉しさ製作したもののみ味わり事のできる感激でしょう。我が跡が高松塚古墳の様

部分は戦災で焼失してしまいましたが、戦後の復興にともなうて新造の屋台はいよいよ豪華になり屋台の生命ともいつてよい彫刻はますます多種多彩、その研をききようになつた。とくに浜松の屋台は夜間引廻しということで、照明の進歩がいちじるしい。

な、それだ

けでは精神方面が欠けるということから、大正十年に浜松利町の五社神社を市の総社と定め、その例祭日を風揚げ期間中の五月四日と変更して以来、代参が行なわれて今日にいたっているが、かつて浜松の場合は、掛家のように神輿に屋台が供奉するということもなければ、また



●上原正市 58才。
岡崎市田町在住。13才で弟子入りし、後に京都で美術を学ぶ高町屋台彫刻。

に我が生涯が終っても残るかと思うと非常に恐い思いが致します。古来より日本民族特有の祭事にて、いかに文化は進んでも、進んだ文化の蔭としての姿は永久に消える事はないでしょう。どうか浜松の皆様、浜松の宝末永く残して下さい。



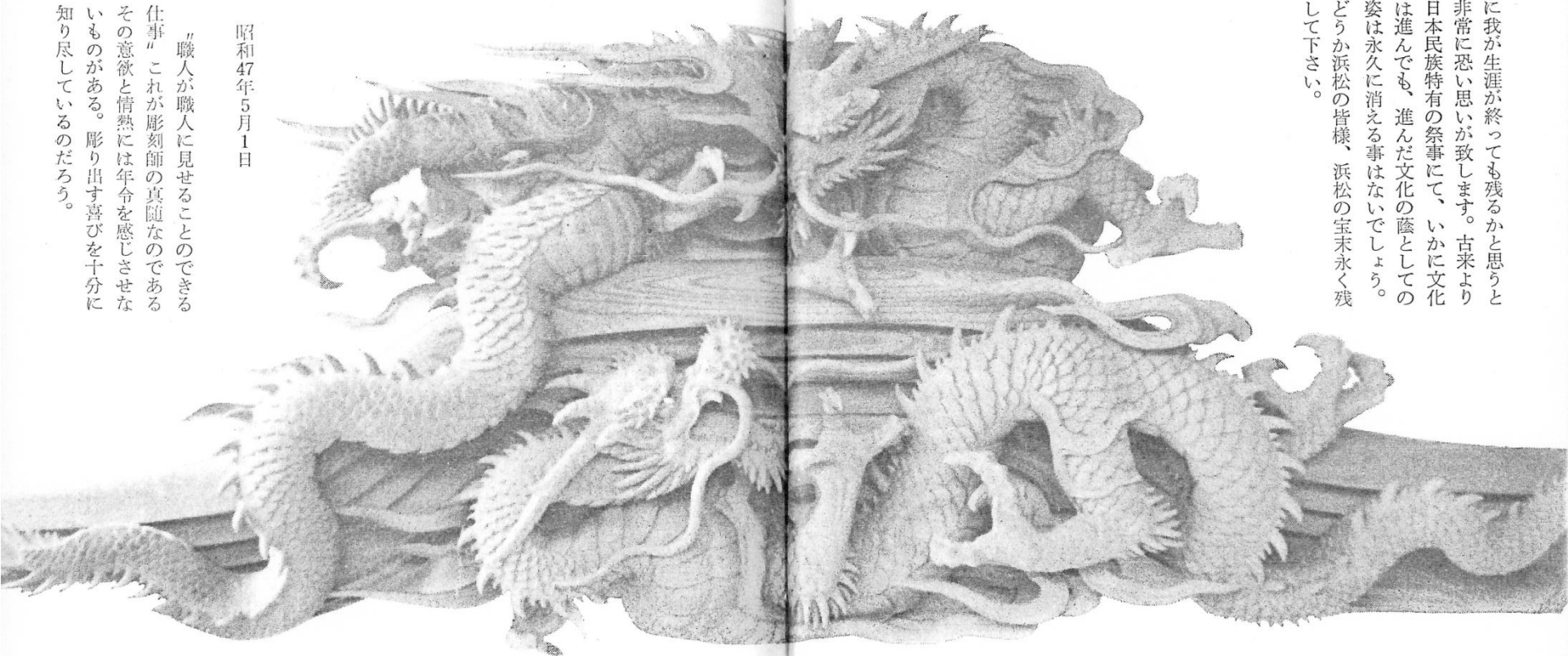
●阿部豊雲 59才。
豊川市駅前通り三丁目。父を親方としての自家修業。佐藤中町、中島町の屋台彫刻。

●彫松 名古屋市内に住み名人といわれ、多くの弟子をかかえていた。成子、東田町、はたご町の屋台彫刻をした。故人。

●岩田新吉 名古屋市中区古郷町在住。浅田、竜神寺、柴、亀山の屋台彫刻。



●中山亮一 61才。
名古屋市中区大高町。岡崎市中山由太郎氏に師事。戦前に鴨江板屋、田町、鍛冶町戦後は宮竹、丸塚、元城、上池川、松城常盤、新町などの屋台彫刻。



昭和47年5月1日

「職人が職人に見せることのできる仕事」これが彫刻師の真随なのである。その意欲と情熱には年令を感じさせないものがある。彫り出す喜びを十分に知り尽しているのだろう。

音曲も掛家のように独得なものも発達しなかった。しかし、最近では風は揚げないけれども屋台の引き廻しには参加する町もあらわれて、風揚げ行事のなかで屋台行列がようやく大きな比重を占めつつあるというのが現状である。

このような屋台論議はさておき各町自慢の屋台四十余台の大パレードはめったに見られない壮観で、さわやかな初夏の一夜をげんらんたる屋台見物にすてす、家族連れ行楽最高のひとときであらう。

●編集室

團風を揚げたり、屋台をひつぱたりしているうちに生まれる逆巻感、戦友みたいなものでもあるし、酒のいきおいで保になり合つたミ同志ミのようなものでもあるらしい。ところが、年々、若い衆はハッピを着たがなくなり、鍛冶町では残念がつて「保存会」を作ろうという動きがあるそうだ。遠州つ子はきどらないのが身上なのに、折角の「祭り」を見物だけですませようとはまったくもつて勿体ない話。祭りぐらゐ、リクツぬきでいこうじゃないの。

●この町内の屋台は誰が作り、彫刻師は誰だ、ということを全部暗記していらつしやつた元魚町の彫刻師、浦部一郎さんに誌上からお礼申し上げます。おかげ様で、この特集ができました。

●工匠の取材を安池、彫刻師の取材を藤田が担当しましたが、花田栄一氏と岩田斯吉氏をとうとう取材できず残念でした。他に、製作者の方のおちがありましたらおわびします。

●人手不足は、この浜松祭りに及んでいて、いい若い衆が足りなくて困るんだそうです。学生は参加を認められていないというようなことで、これなんかも何となく奇妙な感じがします。祭というものには、何か、人間がかつて持つていて、今はどうも漂白されてしまったようなエネルギーなものが依然とあつて、これがいまだに我々の血をわくすんでしょうが、そういうものをギョツとおさえつけられてしまう学生も、きの毒です。ひとつのものに熱狂することが出来ない若者が増えているそうです。かく申す私も案外そのクチなのかもしれませんけれど、でも、いつもきめてしまっている若者なんてのもへんてこりんな感じで、第一、うすきみ悪い。お祭り位、ワーツと熱狂してやるわけには、いかないものかいナーと思うわけです。

●アタシの町内の屋台は葬式屋台なんて云われた事があつたつけ。でもそれは、この屋台が、死人を乗せていた事はないのだから、多分、黒いろうしと照明の暗さが原因していたんだらう。大人たちの目には荘厳なものだつたらしい。発動機のついていない屋台が提灯を大きくゆらせ、車輪をギシギシさせて目の前を通り過ぎる時、幼な心にも感無量であつたものだ。

●浜松百撰／No. 174／5月号●浜松市元城町137外山ビル2F／

●編集スタッフ／顧問／本城イサム・山下浩紀村礼／編集部／安池澄江／鈴木充弘／藤田礼子●印刷／浜松共同印刷KK

いろいろな問題はあつてしょう。交通事情、資金難、祭り自体のショー化、人手不足。決してわれらが屋台の前途は明るくありません。でも、古い、いい習慣や、伝統や技術がどんどん忘れ去られ捨てられていくこの時代にこそ、こういうものは残しておきたい。

やはり大切に守っていかなくてはなりません。なんつたつて、私達の屋台なんですから――。

やはりいいもの
です。